手放してはならない
真の祝福

創世記32章23～33節
2022年7月31日
松田 基子 師

神様はなんと大きな愛を私たち人間に注いでいて下さることでしょうか。 罪に滅び行く人類を、お見捨てになる事をなさらなかった神様は、人類の歴史を、人類救済のための歴史に導いて下さいました。 しかし、その御計画に選ばれた人物は、私たちがこの人こそと、思える様な人物は少なく、その多くは自己中心で罪深く、汚れと、恥の人生を歩みましたが、ただ決して神様から離れなかった事によって、神様の選びの祝福の中を歩み続けました。

神様は、彼らを喜び、見放さずに追いかけて導き、訓練して、御計画の器に変えて行かれました。 創世記に登場しますヤコブこそは、その様にして神様の選びの器に変えられて行った、つまり、神様の祝福を受け継いだ人物です。
ヤコブは祖父アブラハム、父イサクが畏れかしこむ主なる神様に対して、
『この神様が、如何に偉大であるかを
信じていました。』
真の祝福が何であるかは、分かっていませんでしたが、祖父のアブラハム、父イサクが富める人となった事は、神様の祝福だと信じていました。
『自分はその祝福の後継者に
どうしてもなるのだ』
との執念から、ヤコブは父を騙し、兄を騙し、策略をもって主なる神様の祝福を奪い取りました。

そんなヤコブに、神様は、何故ご自身の祝福を受け継ぐ者とされたのでしょうか。 ローマの信徒への手紙、9章11節に、
「**その子供たちがまだ生まれもせず、
善いことも悪いこともしていないのに、
『兄は弟に仕えるであろう』**」
と、リベカに告げられました。 それは、自由な選びによる神の計画が、人の行いにはよらず、お召しになる方によって、進められるためでした。
続く9章13節に、
「**わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ**」
とあります。

神様の御心は、人間の考えの及ぶところではありません。 さて、神様の祝福を奪い取ったヤコブは、兄エサウの殺意から逃れるため、母リベカの兄、ラバンの娘たちの中から妻捜しをする事を口実に、20日路以上離れた、遠くの地ハランまで旅をしました。 将来の不安と、犯した罪の罪責感と、孤独に苛まれていたヤコブに、神様は荒涼とした、正に、ヤコブの心を表していたその所で顕現されました。

その時、神様は創世記28章13～15節で、
「**わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、
イサクの神、主である。 あなたが今横たわっているこの土地を、あなたとあなたの子孫に与える。 あなたの子孫は大地の砂つぶのように多くなり、西へ、東へ、北へ、南へと広がっていくであろう。
地上の氏族はすべて、あなたとあなたの子孫によって祝福に入る。 見よ、わたしはあなたと共にいる。 あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。 わたしは、あなたに約束したことを果たすまで、決して見捨てない**」
との祝福の約束をお与えになりました。
神様はここで、ヤコブを責めておられないことは不思議です。 神様には、神様のお考えがありました。

ヤコブは神様の導きによって、ハランに着くとラバンの家で働くことになりました。 ヤコブはラバンの娘ラケルを愛して、彼女との結婚を条件に、7年間働きました。 しかし、約束の年月を満たして与えられた妻は姉のレアでした。ラバンはヤコブに、ラケルも一緒に与えるのでもう7 年間働くことを求めました。ヤコブは思わぬところで欺かれてしまいました。 14年が経ち、ヤコブはラバンに、カナンへの帰郷を申し出ましたが、ラバンは、創世記30章27節で、
「**もし、お前さえ良ければ、もっといて
ほしいのだが。 実は占いで、わたしは
お前のお陰で、主から祝福をいただいて
いることが分かったのだ**」
と言って、ヤコブの求める報酬を与えることを約束しました。

ヤコブは同意して、それから6年間働きました

が、ラバンは何度もヤコブとの約束を破ったようです。 しかし、神様は、ヤコブを大いに祝福され、彼は多くの家畜を持つ者となりました。
古代の祝福の現れは、多くの家畜を持つ事でありました。 その結果ラバンの息子たちは、
31章1節で、
「ヤコブは我々の父のものを
全部奪ってしまった。」
「父のものをごまかして、あの富を
築きあげたのだ」
と言う様になり、ラバンの態度も、以前とは違って、冷ややかでした。 ヤコブが思案していると、
31章3節で、神様は、
「あなたの故郷である先祖の土地に帰りなさい。 わたしはあなたと共にいる」
と言われました。

ヤコブは決心が着きました。 準備を整えたヤコブは、ラバンが羊の毛を刈りに出かけた留守を狙って、家族全員と全ての財産を携えて、ラバンの許を脱出し、故郷カナンに向かって出発しました。 ラバンがヤコブ一族の脱走に気付いたのは3日目のことでした。 31章23節には、
「ラバンは一族を率いて、7日の道のりを
追いかけた」
とあります。

7日路の距離は、既にユーフラテス川を渡り、ヨルダン川の東岸の山地、ギレアドの山地まで来ていました。 ラバンには神様から
「ヤコブを一切非難せぬように」
とのお告げがあり、争いにはなりませんでした。
ラバンは小さな守り神の像を盗まれた事で悶着を付けましたが見つからず、ヤコブとラバンはそこで互いに契約を結び、円満な別れをする事ができました。

これも神様の導き、祝福によるものでした。
ヤコブの一行は、故郷を目指して旅を続けました。 32章2節には、
「ヤコブが旅を続けていると、突然、
神の御使いたちが現れた」
とあります。 神様はヤコブに帰郷を命じられると、一行を導き守る為に御使いを遣わされたのです。 神様に守られている事は、祝福であり、これ以上の安心はありません。 ヤコブは喜びと感謝に溢れ、
「『ここは神の陣営だ』
と言って、マハナイムと命名しました。」

故郷が近づいてくるに従って、兄エサウの怒りが感じられました。
『裏切ら、騙される』
と言うことが、どれ程悔しく、復讐に駈られる事柄なのか、自分自身もまた、ラバンに欺かれ、何度も騙された事によって、その悔しさは身に染みていました。 兄エサウも、
『きっとこんな風に、自分を殺したい程の
憎しみを抱いたのだと、我が身に受けて
初めて、その悔しさを知ったのでした。』
神様はヤコブに、ラバンの彼への欺きを通して、ヤコブが兄エサウに与えた苦しみに気付かせられました。 人は誰も自分の身に及ばなければ、自分の罪深さに気付かないものです。 しかし、ヤコブは相変わらず策略家です。 先ずエサウの所に使いを出して、ご機嫌を伺い、様子を見て、手立てを考えようとしています。

ヤコブは死海の南、セイル地方に住む兄エサウのもとに使いを出して、挨拶を送りました。
ところが使いの者が帰って来ると、
「兄上様の方でも、あなた様を迎えるため、
400人のお供を連れて、こちらへおいで
になる途中でございます」
との報告を受けたのです。 ヤコブは400人のお供と言う数を聞いて、不安を感じました。
神様はエサウも、イサクの子供として、大いに祝福しておられました。 400人のお供と言うのは、遊牧の家畜と牧童達を守る自警の者達です。

兄弟断絶の原因を作ったヤコブとしては、その数がエサウの復讐にしか、受け取れませんでした。 計算高いヤコブは、直ぐに如何にして、被害を最小限に食い止める事が出来るかを考えました。 32章8、9節で、
「ヤコブは非常に恐れ、思い悩んだ末、
連れている人々を、羊、牛、ラクダなどと
共に2組に分けた。 エサウがやって来て、
一方の組に攻撃を仕掛けても、残りの
組は助かると思ったのである」
とあります。 計算高いヤコブの性格はまだ変わっていません。 しかし、そんな彼の救いは、神様に祈る事でした。 32章10節で、
「わたしの父アブラハムの神、わたしの

父イサクの神、主よ、あなたはわたしに
こう言われました。
『あなたは、生まれ故郷に帰りなさい。
わたしはあなたに幸いを与える』と。」
彼は神様からの約束を頼りに泣きついています。親元を離れて、神様だけを頼りに、今日まで頑張ってきたヤコブには、神様への感謝が溢れて来ました。

32章11節で、ヤコブは、
「**わたしは、あなたが僕に示して下さった全ての慈しみとまことを受けるに足りない者です**」
と言っています。 私たちも神様に対して、
一番必要な心は、
『自分は**神様の**慈しみとまこと、
つまり、**祝福を受ける資格は無い**』
その事を**心底分かること**です。 その事が自覚出来ない為に、
『神様・・・ああして下さい、こうして下さい。
何故わたしをこんな目に合わせるのですか』
と、自分の要求を押しつけてばかりいないでしょうか。 **今日まで生かされ、守られて来た事は、**ひとえに神様が、**憐れみと愛を注いで**下さった、その**祝福の表われです**。

ヤコブは人生を振り返って、その事が良く分かりました。 11節に、
「**かつてわたしは、一本の杖を頼りにこのヨルダン川を渡りましたが、今は二組の陣営を持つまでになりました**」
と感謝を述べて、今一番の願いを、神様に申し上げました。 12節で、
「**どうか、兄エサウの手から救って下さい。わたしは兄が恐ろしいのです。 兄は攻めて来て、わたしをはじめ母も子供も殺すかも知れません。**」
人間にとって命が脅かされる事が、一番の恐怖です。 ヤコブはいま、神様以外に頼る所がない事を訴えています。

しかし、祈り終わると、ヤコブは神様に委ねるのではなくて、自分の考えで再び工作を始めました。 相手の心をなだめるには、何といっても贈り物です。 彼はその夜、兄エサウへの贈り物を選びました。 ヤコブにしては、気前よく、やはり命が掛かっていると思い込んだからでしょう。大変な贈りものです。 雌山羊200匹、雄山羊20匹、雌羊200匹、雄羊20匹、乳らくだ30頭とその子供、雌牛が40頭、雄牛10頭、雌ろば20頭、雄ろば10頭、これだけで一財産出来そうです。

用意周到なヤコブは、それを一群れ毎に分け、召し使い達の手に渡して、口上も教えました。
自分を卑下し、兄エサウを持ち上げ、贈りもので宥めて(なだめて)から、エサウに遭えば、
『兄の心の怒りも解けるのではないだろうか』
とのヤコブの計算でした。

エサウの襲撃を想像したヤコブに平安は無く、23節を見ますと、
「**その夜、ヤコブは起きて、二人の妻と二人の側女、それに11人の子供を連れてヤボクの渡しを渡った**」
とあります。 ヤボク川は、ギレアドの山地から、ヨルダン川へ、流れ込んでいる支流です。
そこを渡れば、また一歩故郷に近づきます。
ヤコブは皆を導いて川を渡らせ、持ち物を渡してしまうと、独り後に残りました。 更に神様の助けを求めようとしたのでしょう。 すると何者かがヤコブを襲って来ました。 ヤコブは腕の立つ羊飼いとしてならして来ました。 格闘には自信がありました。 二人は夜明けまで格闘しました。
ところがその人は、ヤコブが執拗に食い下がって来る様子に、このままでは夜明けになる。
日が射すと戦えなくなると思って、ヤコブの腿の関節を外して、ヤコブの手を離れさせようと、
「**もう去らせてくれ、夜が明けてしまうから**」
と頼みました。 ヤコブはその言葉に、相手が、神的存在であることを悟って、必死にしがみつき、
「**いいえ、祝福して下さるまで離しません**」
と、更に力を込めました。

すると、その人は、
「**お前の名は何と言うのか**」
と尋ねてきました。 ヤコブは素直に、
「**ヤコブです**」
と答えました。 ヤコブとは、生まれて来る時、兄エサウの踵を掴んで生まれて来たところから付けられた名前です。
『踵を掴んで攻撃する(押しのける者)』
と言う意味が含まれていました。 彼の人生そのものを表していました。 彼は、自分の名前がいやだったに違いありません。 父を騙し、兄を

騙し、何時も計算高く、ずる賢く生きる自分が嫌であったでしょう。 しかし、彼はその様にしか生きてこられなかったのです。

神様はそのことを良くご存知で、誰よりも良く理解しておられました。 神様は人間の様に、悪い所、出来ない所を数え挙げて、
『だからお前はだめなのだ。
努力が足りないのだ』
と、突き放したりはされません。 神様はご自身にしがみついて来る者を愛し、新しい存在に創り変えて下さいます。

29節に、
「**その人は言った。**
『お前の名は、もうヤコブではなく、
これからはイスラエルと呼ばれる。
お前は神と人と戦って勝ったからだ』」
とあります。 イスラエルは元来、
『神は戦う』
との意味で、そこから、神の支配を意味するのですが、神様はここで、その名を、ヤコブに下さったのです。 本来神様が、人間に負ける筈がありません。 しかし、ここで、神様が勝たれたなら、ヤコブは死なねばなりません。 神様はヤコブを選んだ以上、ヤコブを生かして、その子孫から、救い主を誕生させるご計画をお持ちでした。
ですから神様は、ここで敢えて、ヤコブに負けて下さり、ヤコブを勝たせて、
「**お前は、神と人と戦って勝った**」
と言う意味づけに、イスラエルの名をお与えになりました。 それは後々、
『神、支配したもう』
と言う意味を持ち、民族の名前になるのです。その民族を用いて、救い主が誕生されるのです。ヤコブに与えられた、最高の祝福でした。

さて、ヤコブは自分の名前を聞かれたのをチャンスとばかりに、
「**どうか、あなたの名前を教えてください**」
と頼みました。 当時の考えでは、神様の名を知ることが出来れば
『困った時に何時でも神様の名を呼んで、
助けが得られると信じられていたからです。』
しかし、その人は、名前を教える事なく、ヤコブをその場で祝福し、いなくなりました。

ヤコブは我に帰り、31節で、
「**わたしは顔と顔とを合わせて**
神を見たのに、なお生きている」
と言って、その場所をペヌエル（神の顔）と名付けました。

神様が如何に憐れみ深いお方であるか、ヤコブは心底分かりました。 陽が昇り、彼は、ヤコブからイスラエルへと新しい存在に創り変えられていました。 **自分の思い、考えに頼る人間**から、一途に**神様に信頼**し、**神様に全存在を委ねる**人間に**変えられて**いました。 新しく イスラエルとなった弟は、**兄エサウとの再会に、自分が先頭に立って行く人**に**変えられて**いました。

神様の**真の祝福**、それはこの世の富に勝って**神様が支配**して下さる、**イスラエルとなる事**であり、そこから生まれてこられる、人類の**まことの救い主**イエス・キリストを**信じる事**です。 私たちは今、その真の祝福であるイエス・キリストを信じる祝福に与っています。 ヤコブが、
「**祝福して下さるまでは離しません**」
としがみついた様に、私たちはこの祝福を決して手放すことなく、神様にしがみつき、約束の天の御国への旅を続けて参りましょう。

お祈りを致します。
憐れみ深い天の父なる神様

何の功しもなく、罪に汚れた人生を送ってきた私達を、イエス・キリストの御救いに導き、真の祝福をお与え下さった事を感謝します。

人生に迷い、躓く私達ですが、イエス・キリストによる真の祝福を、決して手放すことなく、**神様にしがみついて行く人生**を歩ませて下さい。

救い主イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。

アーメン。